

○短歌

天も地もしいまにおこる秋の夜を  
伊藤 天郎

弱音かなしき虫なれや歌  
眞 末

白鶴のつばさふれて露ちららふ  
菊のみ園生琴の音さよさ

○ 田邊 春洋

花ならば朝寒そらに霜うけて白うやせたる寒菊や吾れ  
朝さむを鳴く鶴の白き頬に散りて亂る、秋の花かな  
彼の君をまた思ひ入る秋なれや 萩の花さく夕ぐれの道  
何となう昔おもはる萩園に日記する夕べ雁なきわたる

○ 菅原 喜代藏

秋風の吹くに任せて女郎花色香ゆかしく野を飾るらし  
思ひあまり美き歌ならず宵を只蟋蟀きいて月更かしぬる  
秋姫が小琴の聲かこの夕べしま破りし鳴く秋のむし

○ 水谷 わい子

朝の戸に露白玉の榮えおこる菊ともかゝる君が御歌や  
慈漢寺の五百羅漢に夕日して薄ふけたり風ひやゝかう  
○ 林 静子  
獨りなき野川の水に影さして咲く白菊をめでむ宿世か

秋の月は愁ひに充てりさはれ猶やせ乍ら咲く白菊の花

○ 眞 末

つくくと幸にはぐれしうつし世を夢に迪うむ秋雨の宵

○ 尾上 政子

憂きことの胸に泌み入る夕べなり大野斜に雁なき渡る  
我歌の調べに似たる虫の音や細うかなしき夕月のかけ

○ 伊藤 天郎

この思ひ菊白菊の露と凝りて君がみ袖を濡さば足る  
天地にあまる憂ひのこいに凝りて呼ぶに似たり木枯の風  
秋行くや武蔵大野を雁こえてすゝきに流る天の河原か

○ 中村 鶴聲

さらばなりこの白菊の香を胸に日本の秋の歌綴らばや  
宮と寛の征矢をうけたる痛手なりこの痛手こそ人に跨らむ  
絹のべて書心うかぶ朝窓や

彩雲なして菊亂れさく

木枯は寒き天地めぐり来て

胸の緒琴に亂れ高鳴る

起 雲

